

わかりやすい住居学についての授業実践報告

Class Practice Report on Easy-to-understand Housing and Living Science

森下 剛

MORISHITA Tsuyoshi

1. はじめに

私が初めて梅花短期大学に非常勤講師として着任したころは、家政学系の生活科学科の中に住居学専攻、造形デザイン専攻、調理・製菓専攻、社会福祉学専攻があり、そこで住居学を学ぶ学生たちに建築CADを教えていた。

その後、学科再編により生活科学科は造形デザイン専攻と調理・製菓専攻の2専攻となり、さらに造形デザイン専攻の中にファッションデザインコース、インテリアデザインコース、イラストレーションアーツコースの3つのコース制として再スタートした。

造形デザイン専攻の専任講師となつてからも、インテリアデザインコースの複数の建築系非常勤講師とともに、造形デザイン専攻の学生たちに建築学やインテリア設計、建築設計など体系的に組まれたカリキュラムを通して、学生たちに積み上げ式に建築学を教えていた。

梅花短期大学は、2004年に系列大学の梅花女子大学に統合され短期大学部となり、生活科学科は2012年に調理・製菓専攻を梅花女子大学に新設された食文化学部・食文化学科へと発展した。

食文化学科では教職課程の中の家庭教員の免許を目指すことができ、その中の住居学系科目と建築設計系科目を担当するために、私は食文化学科へ配属された。住居学系科目はすでに開講していた「住まいと暮らし」を残し、建築設計系科目のほうは、学科が食を学ぶ学生たちということもあり、「店舗デザイン演習」という科目を設定した。

「住まいと暮らし」でまず問題となったのは、分野外の学生に対して住居学を教えなければならないということである。

この科目は食文化学科の教職課程において、家庭教員免許取得に必要な科目群のうち、中学校と高等学校の教員を目指すための必修科目のうちの1つであり、学科専門科目としてほかの学生も受講が可能である。履修する学生は住居学や建築学の基礎も学んでおらず、興味のレベルもさまざまである。また、建築設計系の「店舗デザイン演習」とも学科専門科目の中の選択科目のために、受講する順番は決まっていない。指導する立場からすれば、「住まいと暮らし」を基礎、「店舗デザイン演習」を応用として進めたいところではあるが、やはりさまざまな事情で逆転する、もしくはどちらかしか受講しない学生は大勢いる。シラバスを見て授業内容に興味を持った者、教職課程で必修だった者、友達に誘われた者、時間割の都合、卒業単位が必要などさまざまな目的の履修者がいるが、すべての学生達に共通することは、住居学や建築学を目指して入学してきたわけではないということである。

そこで、いかに退屈させず授業に参加させるかが急務となった。ここでは、私がたどり着いた「他分野の学生へ伝わる授業」についての授業実践報告をする。

2. 一般的な住居学の授業について

私は建築デザイン学系の大学で学んだが、そこでも住居学的な科目はあった。すべての内容を思い出すことは難しいが、おおよそ以下のような内容であった。

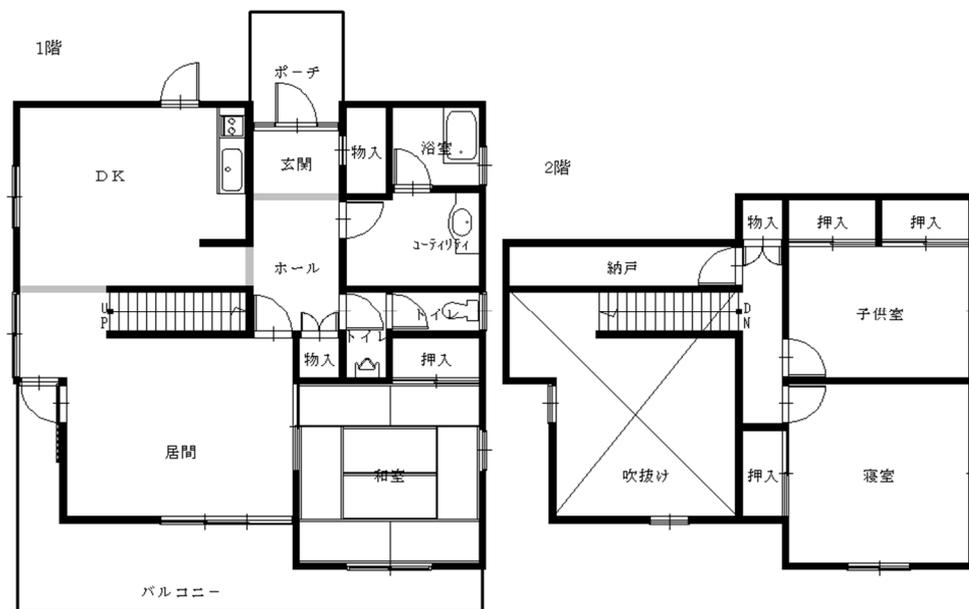
- ・担当教員が設計した建築の紹介
- ・担当教員の設計手法における独自理論の解説
- ・教科書による住居形態の変化の解説
- ・教科書による住居とコミュニケーションの変化の解説
- ・各自が自由に建築作品を選び、レポートにまとめる

基本的に住居学や建築学の科目を置いている学校は、設計士を養成することが目的である。住居学のほかにも製図基礎や建築概論のような基礎的な科目が体系的に組みられ、その先に各自が設計演習に取り組めるカリキュラムが構築されていた。その中で、基本的な専門用語の使い方、建築構造の違い、建築法規、設計製図の読み取り方や描き方などを身につけていた。

もちろん入学してくる学生たちは皆、建築を学ぼうとする者ばかりなので、必然的にそれらの科目は履修しなければならないものばかりである。また、ほかの大学においても、建築学や住居学的な科目は、1年次の基礎科目に位置付けられる場合が多い。ほかの基礎科目と同時期、もしくは積み上げ式に開講するので、建築用語や製図の知識はあるものとして、すべての授業は進められる。

一般的な住居学の授業で使われる平面図は、以下のようなものが多い。(図1)

図1：住宅平面図



出所：Wikipedia 「間取り」 間取り図の例 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

3. 本学での住居学の取り組み

本学の場合、食文化学科であり、設計士を養成する施設ではない。そのために住居学や建築学のカリ

キュラムとして体系的には組まれていない。現在、私が住居学・設計演習で開講している科目は以下の2科目である。

- ・「住まいと暮らし」2年生前期
- ・「店舗デザイン演習」2年生後期

いずれも学科専門科目の中の選択科目で、上級生も受講可能であり、受講する順番やどちらか1科目だけの受講も問わない。このために受講のパターンは次の学生が混在する。

- ①「住まいと暮らし」のみ受講
- ②「店舗デザイン演習」のみ受講
- ③「住まいと暮らし」「店舗デザイン演習」の順に受講
- ④「店舗デザイン演習」「住まいと暮らし」の順に受講

②と④に含まれる「店舗デザイン演習」は飲食店などの店舗を企画し設計する内容である。そのために製図法を学ばなければならない。

「住まいと暮らし」の受講生の中には、①と③のパターンのように、初めて詳しい平面図を見る学生がほとんどである。学生は、住居学の説明で参考とされる平面図を読み解くためには、やはり基本的な名称と記号の表す意味を知る必要がある。④の学生はすでに授業の中で教えられており、受講のパターンにより知識差が出てしまう。そのために現状では、同じようなことをそれぞれの授業で教える必要があるが、それぞれの授業の内容に合わせて以下のような分野で組み合わせを変えている。

「住まいと暮らし」

- ・クライアントの目線で設計図面を読み解くための、製図学の基礎知識をつける。
- ・「平面図」「立面図」「断面図」「配置図」「矩計図」「天井伏図」「図面記号（窓、ドア）」「設備記号（電気）」をパワーポイントと配布資料で説明する。受講生には覚えてほしいキーワードを抜いたプリントを配布し、説明の進行に合わせて記入させている。

「店舗デザイン演習」

- ・設計士の目線で設計図面を描くための、製図学の基礎知識。
- ・「平面図」「立面図」「図面記号（窓、ドア）」をパワーポイントと配布資料で説明し、実際に練習で描かせる。

「平面図」や「立面図」など内容的にどうしても重複する部分がある。しかし、必ずしも学生たちが、座学から演習と積み上げ式に受講すると限らない以上、仕方がないことである。そこで、住宅設計と店舗設計のように説明時の話題を変えて、違いを出す工夫をしている。

4. 映像資料の活用について

私の科目は、食文化領域の専門分野でもなく、学生たちの建築に関する知識はかなり少ない。そもそ

も意識して見ることのなかった住宅や店舗についての情報はないに等しい。まずは、見せることで興味を持たせ、学問として意識させる。次に問題点を考えさせ、その解決策を見つけさせる手順が必要となる。

そこで、テレビで住宅の歴史を扱った情報バラエティー番組を編集して見せ、受講生の理解に役立っている。本来であれば、放送大学や教養番組のほうが詳しく説明されているのであるが、そのような番組は基本的に解説者、ナレーションともに単調で、理解するには多少の知識や強い興味が必要であるものが多い。過去はそのような映像資料も使っていたが、受講生の反応はあまりよくなかった。

一方、現在使っているものは、トーク部分こそタレントがコメントをしているが、映像解説部分は学術的に立証されたものがベースとなっており、基礎知識のない視聴者でも、アニメーションやドラマ仕立てなど楽しく、わかりやすく理解できるように工夫されている。30分番組でも、CMやトーク部分をカットすると20分程度の長さになり、その中で3つか4つのキーワードがテンポよく解説されている。なかにはドラマ仕立てで解説されているものもあり、ほとんどの受講生は飽きる事なく最後まで見続けている。唯一の欠点としては、たまに収録中に映像を見ているコメンテーターの声が入ることと、画面の隅の小さな枠内にタレントの映像が入り込むことぐらいであるが、ほとんど気にならない程度である。

受講生の集中力を考えたときの映像資料の長さは、20分程度がもっとも反応がよい。それ以上の番組も多いが、そのような場合には、番組を紹介するときに前半と後半に分けている。間に口頭や別資料での解説を挟むことにより、受講生の集中力が一度リセットされ、結果的に集中力が持続する。

CMやトーク部分をカットし編集することは、結構大変であるが、映像資料を見せた後の感想文を見ると「見やすかった」「わかりやすかった」という回答が多く、受講生には好評であると考えられる。

もちろん資格養成科目で必修の場合は、高度な内容の映像資料が必要な場合もある。しかし、私の授業のように選択で受講の目的がさまざまな場合は、まず受講生全員により深く興味を持たせるような内容の映像資料も、学問へのきっかけとして十分に使えている。

映像資料の一例

「テレビ朝日 ビーバップハイヒール」「NHK総合 ブラタモリ」

この映像資料では、日本の歴史の中での住宅の変容を学ぶことを目的としている。

最初の江戸時代の長屋は、間取りは簡潔で隣とは壁一枚で玄関は無く、直接に屋外から室内に上がっていた。また、大名たちが威厳を保つために、当時から寺院に作られていた玄関という空間を邸宅に用い、その後大衆化して一般的な家屋にも玄関が作られるようになった。昭和初期の邸宅には、まだ客人を迎え入れる客間が、日当たりのよく、庭を望む一番よい位置に作られている。この客間は土地が狭いために2階建が主流になり、洋風化しはじめたころでも、小さくても玄関横に作られ、革張りのソファやガラスの大きな灰皿、飾り棚などが置かれていた。高度成長期には、都市部への人口集中のために団地と呼ばれる集合住宅ができ、台所と居間を一体化させたダイニングキッチンという日本独自の考え方ができた。当時は団地に住むことは時代の最先端であり、サラリーマン世代にとっても人気があった。現代住宅では、客間や縁側を作ることはなくなったが、そのかわり家族の集うリビングにダイニングキッチンを組み合わせたリビングダイニングキッチンを中心にし、プライベートを重視する寝室や子供部屋は2階に配置する間取りが主流である。

この2つの映像資料を見せ、解説を加えることにより、時代とともに移り変わる生活スタイルの変化と、日本の住宅の変容をわかりやすく伝えている。

「NHK総合 プロフェッショナル 仕事の流儀」

この映像資料では、建築家の役割について学ぶことを目的としている。

建築家の中村好文氏の仕事を紹介しながら、依頼者の暮らしに合わせた住宅の間取りを考えることを伝えている。住宅の建つ敷地を見ながら、風景として残し使えるものがないかと探し、依頼者と何度も打ち合わせする中で、依頼者が本当に必要としている空間を選び抜く。敷地の条件、予算、依頼者の要望など建築家の苦勞も多いが、その結果、要望を越えた新しい暮らしの提案に結び付けている。

「BS1 BS世界ドキュメンタリー」

この映像では、生活スタイルの変化について学ぶことを目的としている。

海外での実験ドキュメンタリーではあるが、現代人の家族が過去にタイムスリップしたと想定し、使うものすべてを過去の最新もしくは流行のもので、日常生活を過ごすという企画である。毎日1年ずつ時代が進み、時代ごとにその当時の最新のモノに入れ替わることで、その便利さを実感するのである。

この映像では、モノの進化のほかに家族の関わりについても触れている。それは、家族みんなで楽しむことから、家族それぞれに合わせた楽しみに分散化されていくというコミュニケーションの変化である。実験の舞台は海外ではあるが、暮らしの変化について深く考えさせられることも多い。

5. 配布資料の活用について

映像資料のほかにプリントを配布することもある。

一般的に住居学では図1で紹介したような既存の住宅の平面図を使い、授業を進めることがほとんどである。建築学を学ぶ学生であれば、それぞれの居室のつながり、建築構造、住まい方など容易に読み解くことが可能である。

しかし本学の受講生は、不動産広告などの住宅の間取り図を見たことがある程度の知識である。私の授業内で基礎的な知識を教えるが、図面記号は多種多様であり、それを目の前の平面図から見つけ理解することはかなりの時間を要する。

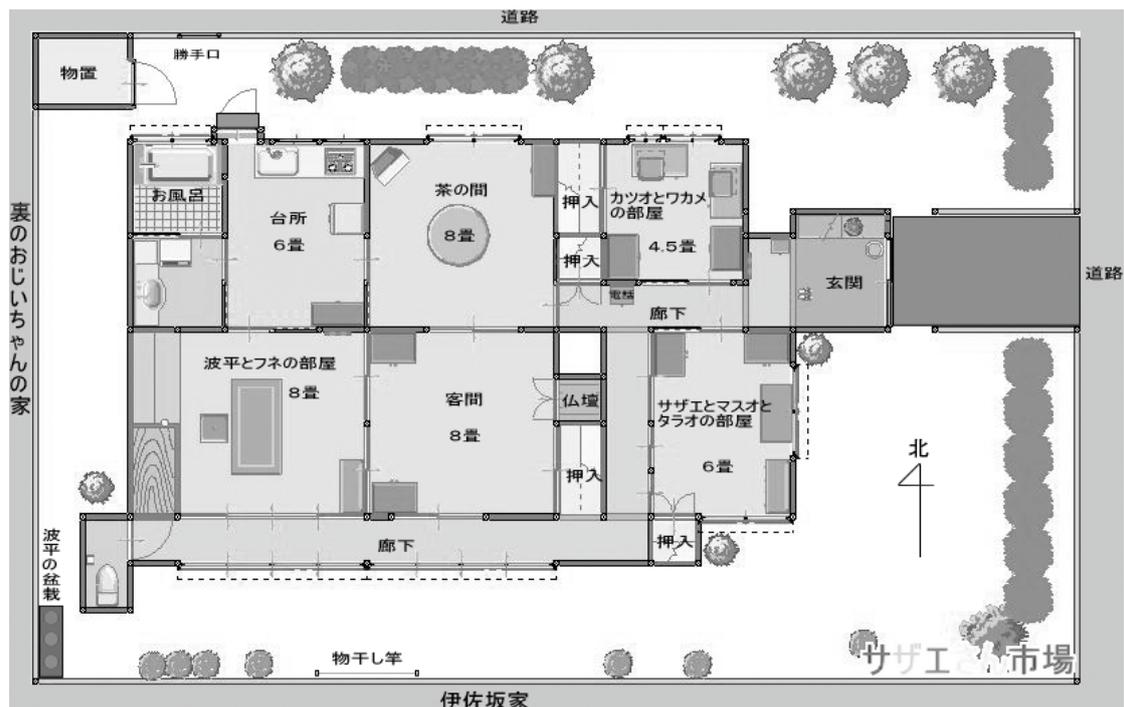
また、平面図から住まい方を想像することは住居学を学ぶ上で大変重要であるが、自分の住まいとの違いが大きい場合は、実際の行動パターンまでを想像することは、ほぼ不可能である。

そこで、「住まいと暮らし」の中では、漫画サザエさん（以下、サザエさん）に登場する磯野家の平面図を用い、授業を進めている。サザエさんは一度でも見た学生がほとんどであり、また、家族構成から近所付き合い、近隣の環境まで物語の中では詳しく設定されている。物語の多くが磯野家内での話であり、住宅と住まい方が描かれている。少しでも物語を覚えていれば、磯野家の平面図を見ただけで、どのような居室かがわかり、漫画のように立体的にイメージができる。

実は、磯野家を再現した平面図は複数存在する。基本的に漫画本をもとに書き起こしたものではあるが、解釈により微妙に違いがある。特にトイレに関しては、位置は同じでも、向きや便器の個数が違うものも存在する。作品が出版された時期が長く、途中で風呂がリフォームされているので、時代に合わせたトイレの改修もあって当然であろう。いくつかの磯野家から私が選んだのは以下の間取り図である。

資料

図2：磯野家の間取り



出所：サザエさん市場 <http://www.sazaesanitiba.com/madori.html>

5-1 磯野家の概要

磯野家の所在地は東京都世田谷区桜新町あさひが丘3丁目付近とされている。付近というのは、番地が複数あり特定はできなかったからである。敷地面積は約70坪で、述床面積は約30坪の平屋が建っている。間取りは8畳の和室が3室あり、それぞれが茶の間、両親の部屋、客間として使っている。さらに6畳の若夫婦の部屋、台所があり、4畳半の子供部屋がある。居室以外に玄関、洗面所、風呂、トイレ、縁側、物置となっている。

磯野家を見て住まい方を議論させることを中学校や高等学校でも行っている事例報告があり、それを参考に授業を行ったところ学生の反応がよく、その後は独自に工夫を加えながら発展させた。また、インターネットで調べてみると、リフォーム特集記事にも磯野家を扱ったものがあり、風水で磯野家を分析しているものも分かる。やはり、どの記事もサザエさんの物語を知っていると理解しやすく、頭に入る。これらをヒントに課題にアレンジを加え、授業進行に役立てた。

5-2 授業の進め方

- ・磯野家の平面図（図2）を配布する。
 - ①磯野家の平面図のから読み取れる長所と短所を書かせる。
 - ②もし、自分の家族と一緒に磯野家に住むならと想像させる。
 - ③もし、磯野家のためにリフォームするなら、どのように変えたいか、また変えたことにより、住まい方がどのように変わるのかを考えさせる。

- ・パワーポイントで解説する。
 - ①全体の概要と家族構成を説明する。
 - ②各居室を説明する。
 - ③漫画の場面と平面図を照らし合わせする。
 - ④作者の長谷川町子氏の描いた設定画を紹介する。

5-3 磯野家の間取りにおける住居学的分析

玄関はベッドや机が置けるほど広い。これは、玄関を内と外を分ける1つの特別な空間とした昔の住居の名残である。もともと日本の住宅には玄関はなく、外から直接、もしくは土間を通り室内へ上がっていた。本来、玄関という空間はお寺などにある内と外を分ける神聖な空間である。それが、身分の高い人の家に加えられ、やがて庶民の家にも加えられるようになったのである。また、昔は冠婚葬祭を自宅で執り行うことが多く、そのために玄関は晴れと卦を分ける空間として、立派に作るが多かった。また、来客の重要度により家へ上げる人と玄関で応対する人に分けることになるが、この広さがあると玄関で応対しても失礼にはあたらない。

客間は、現代住宅にはあまり見かけない空間である。この部屋は間取りの一番よい位置にあるが、普段、家族が使うことは少ない。しかし、来客時にはおもてなしの空間として利用される。現代では、他人を家に招く場合は親しい友人のような間柄の人が主な来客であるが、昔は友人のほかに会社の上司や取引先の人を自宅に招くこともあり、特別な部屋として間取りの一番よい位置に日常的な部屋と区別して作られていた。

居間は、日常的に家族が集う部屋として機能しているが、間取りに対して北側に位置し、あまり日当たりは望めない。台所は居間の西隣にあり、ふすまで仕切られて別の部屋として機能は分けられている。ここに大きな丸い円卓があり、主は南を向き、女性は台所に近い位置に座るといふ、家事は女性がするものという考え方がまだ色濃い時代の座る位置となっている。

台所は、居間のすぐ隣であるが6畳というかなり広いスペースを与えられているので、調理した料理の品々を居間に運ぶことは大変である。家事動線など女性へ対する配慮はあまりしない時代の間取りであるが、さらに古い間取りになると台所は土間であったことを考えると、家事をする女性にとり、冬は足元が寒くなく、システムキッチンがあり、電気冷蔵庫のある生活は、これでもかなり新しい生活を夢見ることができたのである。

ちなみに磯野家も初期の作品には釜戸で調理する姿が描かれており、その後時代とともに、据え置き型のガスコンロからビルトイン型のシステムキッチンに発展している。

トイレは、間取りの南西の角に位置するが、普段家族が集う居間からかなり離れた位置である。居間からトイレに行く場合は、居間からトイレとは逆に玄関へ向かう廊下から縁側につながる廊下を進み、長い縁側を通るか、客間か両親の部屋を通り抜けしなければならない。

このような日常生活にかなり不便な位置にトイレが作られているのは、匂いや汚れなどからトイレは不浄な場所として嫌われ、できるだけ日常生活の場所から遠ざける傾向があったからである。トイレがくみとり式から水洗式に変わり、これらの心配はかなり少なくなったが、もともとあったトイレの位置を後から移動させることはほとんどなく、磯野家では水洗式に変わってもそのままの場所で使い続けて

いると思われる。

くみ取り式トイレ時代の初期の作品には、窓の位置やドアノブの左右により、複数の場所にトイレの位置が確認できるが、本当に複数のトイレを想定していたのか、それとも単なる作画ミスなのかは不明である。しかし、大豪邸でもない間取りに複数のトイレを設置するのは疑問である。マンガ作品は作者1人で描くものではなく、背景画などは多くのアシスタントに任せることも多い。ここは作画ミスもしくは、カット割りの都合という事情で描き分けられたと考えるのが妥当である。

縁側も現代住宅にはあまり見られない空間である。まして、住宅の一番日当たりのよい南側に位置する。磯野家が一番使う居間は、普段あまり使うことのない客間を挟んでいる北側である。そもそも縁側の機能であるが、太陽の位置の高い夏は、強い日差しが部屋の中へ差し込むことを防ぐ深い庇のかわりとして、逆に太陽の位置の低い冬は、床板に反射した光をできるだけ奥の部屋に届けるためである。歴史ドラマの中で建物の外部を通路とする外床がよく登場するが、時代とともにガラス戸がはめられ、近代では室内化されたものである。

磯野家の廊下は、必ずしも各居室をつなぐものではない。例えば台所と洗面所は廊下に接していない。両親の部屋と客間は縁側に接しているが、廊下を通りほかの部屋へ行こうとすれば、かなりの大回りとなる。もともと日本家屋の各居室は壁ではなく、襖や障子で仕切られる構造のため、隣の部屋への移動のために廊下を設ける必要性はなかった。現代住宅では、各居室は廊下でつながる構造となり、隣り合う居室も襖や障子ではなく壁である。

風呂は一度、リフォームされている。もともと浴室の壁や浴槽は木製であった。恐らく水や湿気に強い桧であろう。しかし、入居後に浴室をタイル貼り、浴槽をユニット式に入れ替えている。

初期の作品には、磯野家には風呂はなく、銭湯に通っていた。その後、現在の位置のコンクリート土間に移動ができる木製風呂釜が登場する。燃料は薪を使い、煙は煙突により室外へ放たれるようになっていた。

5-4 磯野家の間取りと現代住宅の間取りの比較

磯野家の間取りは昭和30年代と言われている。広い敷地に対して、平家の住宅がゆったりと建てられている。南側には伊佐坂家、西側には裏のおじいちゃんの家が隣接している。まだ自動車は高級品の時代で、敷地に余裕があっても駐車場はない。

家族の居室は年功序列的に南側に近い位置に置かれているために、子供部屋は北側である。玄関までのアプローチは手入れされた庭木、玄関に入るとゆったりとした広さがある。南側には庭もあり、客間から見える位置には手入れされた庭木や盆栽が置いてある。日常的に家族が集う居間よりも、客間のほうが日当たりのよい場所にある。どちらかと言えば、家族のためというよりも、来客への心遣いを考えた開放的な間取りである。

現代住宅は、狭い敷地に複層階を積む設計が主流である。土地が狭くても駐車場を作り、日常的に使う居室以外にも、台所と居間を1つの空間にしたリビングダイニング、クローゼットや屋根裏部屋など、非常に工夫され効率的な間取りになっている。

家族が集うリビングが一番いい場所に配置され、室内はそのリビングを中心に開放的であるが、きちんと個室も用意されており、家族間であってもプライバシーを重視している。

5-5 解説に対する学生の理解

概要や家族構成については、まずサザエさんの物語を思い出させることに重点を置いている。学生が覚えているサザエさんは、テレビアニメ版のほうであると思われるが、漫画版とテレビアニメ版の違いは、今回の課題では特に問題とならない。

各居室の説明であるが、配布した間取り図を見て、すぐに磯野家にだと気づく学生もいるが、それは間取り図に記載された〇〇の部屋という記載からであり、もしその記載がなければ、ただの古い昔の日本家屋という印象でしかないであろう。物語の中ですべての部屋のつながりを一度に見るシーンはないので、間取り図を見ながら自然と友達同士で確認作業が始まる。

次にパワーポイントでテレビアニメの1シーンを投影し、その場面はどこから見たものかを当てさせる。テレビアニメの特質上、俯瞰的な描かれ方が多いが今回は特に問題としていない。学生は家具の配置や開口部の位置、種類で推測する。ほとんどのシーンは、隣の部屋から見たものが多いが、このことから、隣の部屋とは壁で分断されていないからと気づく。そうすることにより部屋と部屋のつながりがより理解できるようになり、このような間取りは昭和30年代にはよく見られたものであると説明を加えている。また、トイレの位置が現代と大きく違うことに気づく学生も多い。これもまた、トイレの歴史として話題を取り込むきっかけとなっている。縁側という空間も田舎の家で経験した学生は思い出話として語られ、また、経験したことのない学生も知識の中で憧れを抱いている者も多い。

各居室の説明は、現代の住宅との違いに気づかせることを目的としている。

例えば、磯野家には台所という独立した6畳の部屋がある。物語の中では、サザエさんと母フネさんが料理をする場所であり、できた料理は隣の居間に運ぶ。しかし、現代の住宅では独立した台所は作らず、居間と合わせたダイニングキッチンという1つの空間にまとめることが主流である。ここで、ダイニングキッチンという概念が生まれた時代背景を説明する。高度成長時代に入り、都市部に人口が集中する中で住宅不足が発生。それを解消するために団地という大規模集合住宅が都市部近郊に開発され、狭く少ない居住空間をできるだけ効率よく使うかを考えて生み出されたのが、台所と居間を1つにしたダイニングキッチンという日本独自の考え方である。生活様式はますます洋風化し、このダイニングキッチンという住まい方は新しくできる住宅では、現代的でおしゃれな空間としてもはやされたのである。

客間をわざわざ住宅の中央に置いているのも、玄関を広くとっているのも、内(家族)のつながりよりも外(他者)とのつながりを重視しての間取りである。物語にもよく来客がある場面が登場するが、簡単な挨拶は玄関済ませ、大切なお客様は必ず客間に通している。お客様の通る客間への動線も、縁側からとなり、家族のいる居間は通らない。

ほかにもトイレや風呂は不浄な場所として、もともとは母屋から離れた位置に別棟として建てられていたが、それらが母屋に組み込まれるようになった。しかし、トイレはまだくみ取り式であったために、

匂いを避けるため建物の隅に作られた名残が、磯野家に見られる。やがてトイレも水洗化されると匂いも気にならなくなり、今では使いやすい場所に置くことも一般的である。マンションの風呂やトイレは窓すらないのである。

5-6 問いに対する学生の答え

以上のような内容を説明し、学生に感想を書かせていると、やはり学生それぞれの住居体験により、さまざまな意見があるので、主な意見を紹介する。

- ・広い土地に平屋は贅沢な間取り。
- ・音が筒抜けだと思うので、プライバシーが守られない。
- ・私の田舎の祖父母の家に似ている。
- ・客間がもったいない。
- ・居間に家族全員が集まると狭いと思う。
- ・家族間のプライバシーがなく、私は住みたくない。
- ・冬は寒そう。
- ・縁側があるのがいい。
- ・私なら土地の半分を売って、そのお金で2階建てにする。
- ・駐車場がほしい。
- ・広い庭で家庭菜園がしたい。
- ・台所と食卓が離れていて家事が大変そう。
- ・トイレが遠くて不便。

やはり否定的な意見の中で一番多かったのは、プライバシーについてである。居室にドアがなく、襖というドアに比べれば簡易な仕切りのため、音漏れの心配や人の気配を感じることを気にしていた。しかし、昔は家族間であっても話し声や物音にも気遣いがあり、家族同士の距離感が保たれていたと考えられる。家族はそれぞれ立場のある最小限のコミュニケーション社会であり、さらに磯野家と地域、地域と社会というように、コミュニケーションの規模を広げていたのである。現代では、プライバシー重視の間取りは当たり前のこととなり、家族同士のつながりや、家と地域とのつながりも薄くなっているのも事実ではないだろうか。

6. まとめ

学生たちにとり「衣・食・住」のうち、もっとも話題にならないのは、やはり住まいのことである。ファッションであれば、媒体を問わず情報も多く、また街に出ればたくさんのショップが並んでおり、デザインを比較することも、試着で着心地や自分にあったものを見つけることも可能である。料理やスイーツなどの食べ物も同じで、お店に行って食を体験するのも容易である。

一方、住まいに関しての基準は自分が普段住んでいる家だけであり、他人の住まいをイメージするこ

とは難しい。まして、専門用語や図面だけで立体的に原寸の空間をイメージするには相当の時間と経験が必要である。

不動産広告やテレビのインテリア情報番組で紹介されるものも、あくまでも一般的な理想の間取りが中心である。そこから伝わるのは、きれいな外観や立地条件、流行のインテリアで美しくコーディネートされた世界観である。その住まいが本当に自分の生活にあったものかは、実際に住んでみないとわからないのである。そのように考えると、住居学はたくさんの人が共通体験をすることが、非常に難しい分野である。そのために設計を業務としている建築家の役割は重要であるが、専門的な知識がないと難解なコンセプトの建築作品もあり、建築関係の学部・学科の学生でないとすべてを理解することは難しい。逆に教科書的なものは、学生の知識が少なければ間取り図も単なる絵か記号でしかない。

そもそも間取り図から立体的に住空間を想像できる人は少なく、そこでどのような生活がされていたのかを想像することはさらに難しい。建築関係の学校でなければ、興味があり、間取り図を見ることが好きだと言ってくれる学生は、ごく少数である。

しかし、磯野家の間取り図を使うことで、今の生活と昔の生活の行動パターンを住宅の間取りを通して比較することができる。さらに、改善策を考えることを通して、家族のつながりも意識した間取りを提案できるようになっていると思う。

入学してくる学生の目的も多様化し、大学の教育も必ずしも1つのジャンルに収まらないカリキュラムも増えてきた。そのために昔であれば分野ごとに体系的に内容を濃く組めたカリキュラムも、今では多くの学生を満足させるために幅の広い分野に枝分けすることができ、さらにほかの分野との連携も視野に入れたカリキュラムへと変わってきている。そのために学生の興味度は差が大きくなるばかりで、授業の難易度をどのレベルにするかは、毎年どの教員も頭を悩ませているのも事実である。

ただ1つ言えることは、いくら学術的に素晴らしい資料や映像も、授業を受ける学生に伝わらなければ意味が無いということである。伝わることで知り、理解ができ、知識として残り、ようやく学問として考えるきっかけとなるはずである。

毎年の授業アンケートの結果も、資料が適切でわかりやすいという項目が高い評価である。さらに授業を通して住まいに対する興味が増えた、自分で家を買う時の参考にしたいという意見もあった。

今後も、わかりやすい資料や番組があれば積極的に授業に取り入れたいと思う。

出典：

よい家づくり 悪い家づくり 土屋博幸 1990年 主婦と生活社
住領域から考える「サザエさん」の家庭科教育論 渡辺光雄 1999年 教育図書株式会社
サザエさんの秘密<新装版> 世田谷サザエさん研究会 2004年 株式会社データハウス
磯野家の謎 東京サザエさん学会 2005年 日本文芸社
名作マンガの間取り 影山明仁 2008年 ソフトバンク クリエイティブ株式会社

この科目を担当してしばらくたつが、あらためてインターネットを検索しても、すでに閉鎖されたホームページもあった。そのため、現時点では出所のわからない情報もある。